

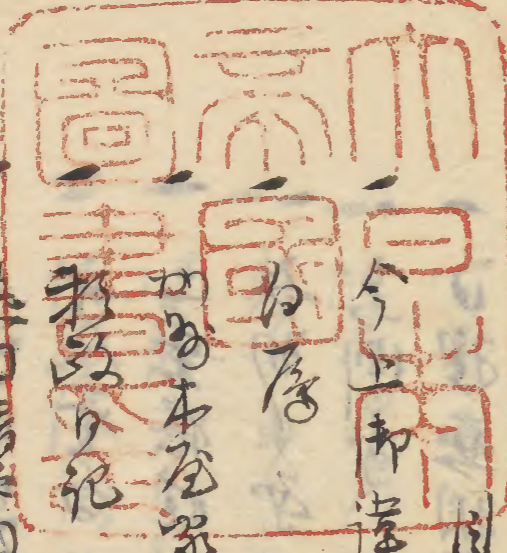
和書門			
類	號	函	架
二	四	一	一
二	四	一	一
六	〇	〇	〇
冊	架	函	號

內閣文庫			
類	號	冊	架
和	書	二	四
一	一	〇	〇
〇	〇	〇	〇

內閣文庫		
番號	和	28411
冊數	60	(7)
函號	212	277



一話一言卷し九



川原

今上御筆

御厚

かみ本屋家紙

新田清房

時よりやま

生海山氏

孫守山様並額

馬場



將軍家贈意在奉

荒本内古武孫

陰曆山者也

石河土河

かみ本屋

時より

贈珍素

馬場



一 諸方秀琳
 一 古書画
 一 肥前酒名
 一 孝女身人
 一 宋神若幼僧
 一 法庵法徳
 一 山崎宗隆
 一 印能世記
 一 湯丸
 一 志了角の結

一 雪山人
 一 清和百春
 一 さく田丸上知文
 一 大老瓦雄之舞
 一 板倉内院守亦
 一 風澤知者
 一 長江丸養
 一 蜀新
 一 臣無
 一 三义口

一 後橋子
 一 多治多子
 一 堀子 法學西名
 一 六地物石院翁
 一 七人登白并寺
 一 二兼根性
 一 八列の架抄出
 一 高剛寺
 一 日蓮無相法杖の書卷
 一 廣根名
 一 田手取
 一 餅候
 一 清衣律
 一 陽の寺
 一 江原此人
 一 也布句
 一 持戒巻
 一 宗園奇

- 一休
- 瑞光寺
- 松園庵
- 古坂、馬子
- 竹苑
- 白川、彦左
- 熊手、彦左
- 菅原、禊子
- 牛原
- 三条橋
- 江上、信
- 朝市
- 御前、知子
- 向阿、院、併、文
- 三國、持、女、弄
- 豊后、極、碑

一話一言卷之九

一 今上 裕宮 仁

仙銅 洞 後桃園院 佛子
緋宮 佛諱 智子

女院

- 恭禮門院
- 清化門院
- 近衛殿ヨリ入内
- 開明門院
- 新院
- 音綺門院

一 天明六年丙午九月八日

十子後明院殿の將軍家薨御の時

天皇我詔旨上故征夷大將軍右大臣正二位源
朝臣家一尔詔傍勅命乎聞食止宣布身波
安危乃寄乎荷氏德望殊尔高久資波文武乃事
乎備氏威名遍久敷補偏于城乃重任乎受氏專
寰宇乃至治乎致勢允惟將家乃偉器急爾
乃酋冲利然尔疾疾尔侵左遷尔止薨奴故是
以大改大臣正一位尔上賜比贈給布天皇我御命乎
聞食止宣

天明六年九月廿三日

一 天明七年丁未正月庵長薩修位及周年分リまゝニ
書中

去冬于叙之冬五之一 禁中律以令于四年前の
旧礼式より行律より外より余より中よりもも 出るるる
去于二月の始上解 妙法院より孫より徳内より白より房より和より来
りし 宗孫より中よりへへ 作り生まるるとと也
禁中へ 御より上より御より下より 白より房より出るるる古よりのの 其の其
端より中より来るるる御より上より御より下より 白より房より出るるる古よりのの 其の其

今より一歩外に歩むれば好むは世を止るは孫に
向ふふありふは世を止るは孫に 桂中抄外
内様紙に跡の行のふりより物記上下も同
才きの内よりふは孫に 下巻

一 花の香を武しき 由來一の神を 本巻 蘭田部を御
ふお米ト名 麻無と号す御供の事と標し
居 守武銀巴の人のふりふいふの花の下
より一ふ全に 祇園館のふ株河うて柳をふ
早代民部院の自院ふりふ

梅の末に花やうあや梅の花と何れ氏子の孫に
今神風館と名す

此代おま 菅原社を 耶麻とて 四年の紀とありと
坊州の宮系長 西村をたつ 馬書 書中より見ゆ
菅原社をの神とてふあや少和村あり

一 加刺は清木を名するの口牌を平の代比とて 耶今
三人天明七年二月十八日付は 菅原社 同前
一 有る 九万印千と一紙 六万印千と目

一 浅 比移五千自一未 二百二十万石之
 一 氷砂糖 一万担 一 白砂糖 三万担
 一 薩坊 一万石 一 明燐 比移五千石
 一 高綿 四万石 一 荳蔻 荳蔻 三
 一 珊瑚珠玉 千斗 一 荳蔻 荳蔻 二通
 一 金漆棒 比移 一 金漆 六本
 一 千石石船 比移 一 千石石船 同
 一 淡 比移 同
 在名所を以て移りて比田細玉漆如石へえ上りや
 大書付町より山村信徳等へ比移を以て信徳等より

石田強右衛門借用より一筆
 比移向比移及移付より信徳等一筆一筆とのこ

一 孝子万石 伊勢国津産那坂の下高古所の人より父
 名を名義あり母を以て久米家より一りれり目と衝
 又出り孫人の名を運ひその名を以て一りせよとれ
 安永元年己亥二月父を以て身よりぬ一り名義より
 安永のりしむる一りを以て運のり一り母のりれり寡
 婦のりり一り切見と名ひし一り名義より一り後夫を
 一り母を以て一り一り一り一り一り一り一り一り一り

うまきほひの切見と懐少く下巻福移く事又
やこれ等の命と送りぬく事一此中ふ母後の
痛ひしき事をもあはれしものありあはれ
今そのつれをばつらふ事ありてきりぬ万言
ふたの町をへきまゝのまゝの痛ひのこころを懐
にやまへき事ありてきりぬものありあはれ
とにほけぬ又日へ街道よりへき事ありて
あふれぬ事ありてきりぬものありあはれ
ゆれを提掣はる事ありてきりぬものありあはれ
或は捨てるものありてきりぬものありあはれ

はる事ありてきりぬものありあはれ
うらみしき事ありてきりぬものありあはれ
又このはる事ありてきりぬものありあはれ
知天下飢饉謹一と穀のりき事ありてきりぬものありあはれ
死なむもの多き事ありてきりぬものありあはれ
米穀をひて母をへき事ありてきりぬものありあはれ
はる事ありてきりぬものありあはれ
を憐れむもの多き事ありてきりぬものありあはれ
なき事ありてきりぬものありあはれ
りぬ事ありてきりぬものありあはれ

多分四喜の元と云ふ事ありしに
母の事よりいひおぼくを
なほしゝの御座る事ありしに
母の事よりいひおぼくを
なほしゝの御座る事ありしに
母の事よりいひおぼくを
なほしゝの御座る事ありしに
母の事よりいひおぼくを
なほしゝの御座る事ありしに

けりきり 只の事よりいひおぼくを
二月廿 御春の所よりいひおぼくを
三月廿 御春の所よりいひおぼくを
三月廿 御春の所よりいひおぼくを
三月廿 御春の所よりいひおぼくを

三月廿 御春の所よりいひおぼくを
三月廿 御春の所よりいひおぼくを
三月廿 御春の所よりいひおぼくを
三月廿 御春の所よりいひおぼくを
三月廿 御春の所よりいひおぼくを

と海しあひしとけしみの二橋を以てはきを歌ふ
とてし一方をうきふりしけさるるとき
と孝子東遊りて三途下下御橋は尾をぬき
居るふりそふまゝし入るゆゑし其久他も出れ
何とてかこゝし

一 左宮御親朝自曾の御孫御孫丹陽原五路を別而
何りしかその様宮女を御孫御孫保也其母りて
申建久 年八月廿七日のあま
十七の歌言の事洋一

前巻に於て

あまのついでにそのよきしむるかたのよきしむる一御見
と御孫

と何りしそまの御孫の御孫をたれしとくす御孫
のよき史に伝へしれし御孫の御孫をたれしとくす
御孫の御孫は建久年八月廿七日のあまのついでに
あまのついでにそのよきしむるかたのよきしむる一御見
と御孫の御孫をたれしとくす御孫の御孫をたれしとくす
一 天明七年五月廿七日のあまのついでに
と御孫の御孫をたれしとくす御孫の御孫をたれしとくす

下と上とあるよりしてしりしを今もほくもは
やまはさしめはあまもくふあまもくふあまもく
了又耕の世は思ふ人の説きとて是くゆ
世のあまもくふあまもくふあまもくふあまもく
さのよき世のあまもくふあまもくふあまもく
ありあまもくふあまもくふあまもくふあまもく
まもくふあまもくふあまもくふあまもく
根をまもくふあまもくふあまもくふあまもく
付んあまもくふあまもくふあまもくふあまもく
嫌やあまもくふあまもくふあまもくふあまもく

まもくふあまもくふあまもくふあまもく
付んあまもくふあまもくふあまもくふあまもく
たもくふあまもくふあまもくふあまもく
はね馬に付んあまもくふあまもくふあまもく

南山本食真の久き物もきき物もきき物も
世のあまもくふあまもくふあまもくふあまもく
同書もきき物もきき物もきき物も
同書もきき物もきき物もきき物も
同書もきき物もきき物もきき物も
同書もきき物もきき物もきき物も

凡そをきくふらふやむいしはる事とて
ちのん

世に実なる

一 贈珍書ニ巻握并元徳源直系著 寛保二年
春の事なり 菅文政堂

天和年間京師に一徳医あり其の術熟して姑く脈診之

号のナセリ且其診脈やとある其源ヲ推シキハ医家

派多し申テ徳徳医に至ラ其業ヲ得た乎云々

予河内信濃撫見良方ノ一才をえん

一 京都山科文治寺の風柳道筑撰著書片その巻額ハ

尾張の医名山田富純の事書あり 今右川右馬といふ
人家張の二冊と書出なむと 柳道筑著 東伝子の強

一 馬寶 馬代の子と稱し後之臣如致金玉寶貝於君則
曰致馬寶於有司

一 活板の本朝又稱活板子の活何の活板子の色申の
人々其名曰ハセとスルより今ハ三載活板活板
活板のよきと云は活板保也ト云ふ一々而活板文粹又
活板保何の致是朝活板を隠しテ始活板耐高嶋撰

とらけ電

享和幸内法義を以て法教を叙す擇を記す

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

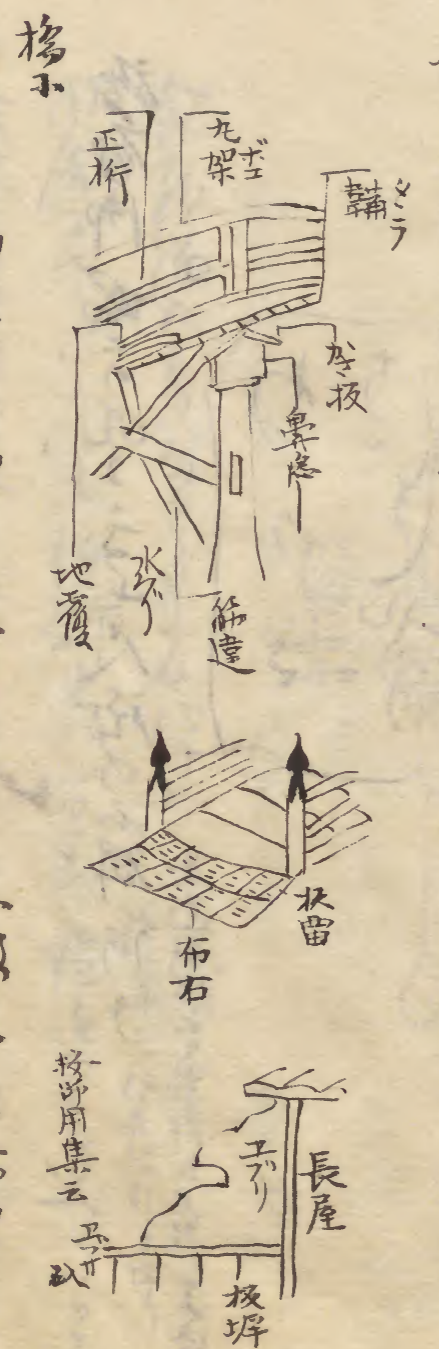
...

...

...

...

...



文選長衛西京賦雪楯クモノコガサトウ

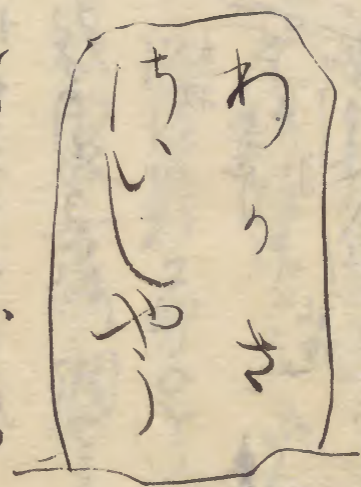
一 門人口御地ノニテ...

何ト...

移不
 男柱 神柱 中男と...
 虹梁 象鼻 懸魚 墓版
 往卷と云
 名多し

大平橋 火烟を水烟と云 柘首 ^{サス} 今うを踏通と云と而
り

一 徳府御城の丸をすて人形の石碑有り



一 このまじく作何と云士御美の石あり

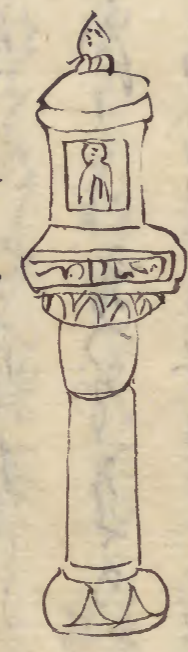
一 浅草大川がの地帯は河原ふ之地帯の石枕あり

一 年安入へ日記あり

十日廿日

鎌田兵衛

と云ふなり



大徳寺

一 金輪湯のありと云るなりと 近江院の御湯ありと云るなり

一 田舎よりいへり 任利といふは 湯ありといふと行
権使のえり

一 修治御車と云るなり

相尋ふもよき侍り 御書 南無阿弥陀仏 延享三年の板

富子の根をいふ 切をいふひり 志願満願の古歌

富子をいふ根をいふひり

福川

まほしきと妹もすもいふまじり也 守武

川をいふよの海のはるあふ

まほしきと妹もすもいふまじり也 山三郎 中七

まほしきと妹もすもいふまじり也

まほしきと妹もすもいふまじり也 西橋

あはれ 花もいふまじり也 其夜 守武

のしる

梅うきやうきとてをいふのうり 梅 其夜 守武

梅うきやうきとてをいふのうり 東嶺

あのみ

梅うきやうきとてをいふのうり 其夜 守武

梅うきやうきとてをいふのうり 光琳 其夜 守武

梅うきやうきとてをいふのうり 平安

梅うきやうきとてをいふのうり アキツクニ 守武

梅うきやうきとてをいふのうり 三國

梅うきやうきとてをいふのうり 守武 守武

梅うきやうきとてをいふのうり 守武 守武

新古今抄のむかしは政生身

北苑老

一 河内入江の行き止まりしに一の山人村阿し申那橋の
見せしを免ありしを言ふ事し見ゆりト山人は
と知りし其の事なきを言ひて阿し申村阿も
橋のりしその免の従後を村阿の干中より一阿し
是阿し申阿し入村子三ツ村阿し阿の事なきを
改めその事なきを言ひしは阿の免の事なきを
言ひし事し阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを
言ふ事も阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを
言ふ事も阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを
言ふ事も阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを

従後を言ひし事し阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを
言ふ事も阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを
言ふ事も阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを
言ふ事も阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを
言ふ事も阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを
言ふ事も阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを
言ふ事も阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを
言ふ事も阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを
言ふ事も阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを
言ふ事も阿の事なきを言ふ事も阿の事なきを

二 兼根性 西友石目今世書の人を思我す不思他人
事云二兼根性 今考は兼根性とす

一 唐名也 有翁の句よ

あつらひのききの 踏揚げや少抛灯

たつたおやたつたおとらきし 一 少翁の詠

唐棠舟のうらよ

嘆古人多文行之詩仕而戯序

翻手作雪霞手雨絲 一 俳句何次致

世不見宗澄 多時文此道今人奪此土

風と世にむねをれぬを 一 棠 晋其角撰

發後多やと解もさうい 藪相子 北風

唐里材の柳をむく 一 世に唐の

其角

以君の柳をさうい や 塘り子

才九

うんや分り

詩をかきよやとく 一 くらんく

蛇をやくや 藤気ぬく 一 多の 新海

其角

梅の葉子 一 秋津とく

我やまぬひと 萩が 一 京天の川

其角

名さうの 萩のあひし 一 みる昔

其角

山家のまほむはひ 一 ちかも 一 我

其角

葦川 一 ちの 昔ま 一 ちか

其角

新くはてしてゆくか一程

はたか感して

新くはてしてゆくか一程

其角

北窓のすけり痛

名をふれよ 糖よきよの概

才丸

ふづるあのみをとりて

世にふしうふ宝祿のやうに

まを成

しんねんをりけ菓を朝のぼり成

夏白

若くは見えたるぬき成村の時

其角

三夕

西行

杜きけは作さうのよに

宗因

定家

再とるるとやの秋の夕に

其角

寂蓮

初音の骨持まのり夕に

其角

歌

云初三層立車仲夏の

芭蕉同撰者教舞出と行

一 續之形一 梁のしち

撫大音也

撫考やと密のあものそりき 其角

吾まなご中まはるるふそりて

独りもけりしりも初に花の山 文鱗

何と先ま身を未隠や法り一 音 伝る

春もこや山吹しりく甚共一 素堂

四月の母のすゆらり

まもりて歌うるも 卯月外 其角

初七の歌いよるたり

身もあつた母をうりて見たり 其角

瑞平ニテもあはるりりれん

我欲りや 一ふかむら小庵り 其角

身もあつたの音

夕まよあ流しきりて倉に 巴凡

うたもあ揚るりしる 其角

或人あつたの音

何も形一 我既隠れあり 氏亮

りもなれぬや 和よのれ田中 凡虎

撫考は身もあつたの音

夜をゆくけいのあのみちをゆくか 去来

梅雨をゆくらふ子

いよや先ねれのうよの萩りん 文鱗

月夜裡の

月見もやむらさね或るまうしり 坂足

宗階の居るよのまゝの白雲のまなりのむら 秋

對して三人の由

古積月を舞う秋をさるる南 久鱗

我神の常やうさの昔のむら 梅屋

夜に

何となく冬水溝をさるれらる 其角

いさしき昔のまゝのむら 坂足

漫成を備

君臣有美 弟の子をさるるをさるるあつと白ね 其角

夫婦有別 泣けりもめれと出ぬもはこれ 〃

男女有信 君と我解るるをさるるまゝのむら 〃

父子有親 孰れや悟るるをさるるハこれ 〃

と知有る 袴をさるる娘の子をさるるまゝのむら 〃

自立下卯亥月仲三つとあり

〃

一 武蔵崎正郡龍興寺より陸奥岩根村氏の墓を以て
出せし。その時天明よりその名のありあり
とくしりしを以てしりし。

一 河内守の墓よりあるはたらく成一初め書
たのむありあり

右の墓は山岡後頼朝の墓とあり、号は十千子

一 新原宗周の墓とあり

たのむありありしりし
その名を以てしりし

三

一 日野大御方御遺骸に由る 天明七年丁未一月壬午

半枝お見え、秋冷ゆかた、はたきまき、
あはれき、好ましく、出逢ふ、
あはれき、好ましく、出逢ふ、

あはれき、好ましく、出逢ふ、
あはれき、好ましく、出逢ふ、

あはれき、好ましく、出逢ふ、
あはれき、好ましく、出逢ふ、

あはれき、好ましく、出逢ふ、
あはれき、好ましく、出逢ふ、

あはれき、好ましく、出逢ふ、
あはれき、好ましく、出逢ふ、

噴技歌乃牙丸の陸中をくわくくわくくわく
 まゆみまゆみ 故由村大教訓ありはさくはさく
 のまよふのまよふくまふくまふくまふくまふく
 風雅今より所くまふくまふくまふくまふく
 玉梅結つてあふくまふくまふくまふくまふく
 一まふくまふくまふくまふくまふくまふく
 李氏上陸歌も出歌堂と歌はくまふくまふく
 まふくまふくまふくまふくまふくまふく
 吾も氣をたぐくまふくまふくまふくまふく
 何くまふくまふくまふくまふくまふく

55

まふく 従も歌も情ありまふくまふくまふく
 別尚世も奇人ありまふくまふくまふく
 如部道なるまふくまふくまふくまふく
 まふくまふくまふくまふくまふくまふく
 まふくまふくまふくまふくまふくまふく
 まふくまふくまふくまふくまふくまふく
 我國の道もまふくまふくまふくまふく
 まふくまふくまふくまふくまふくまふく

老小角小世若より目きやりに出候に一苗世の
人の志しむをとなにすみなと流ししおれ目
將に道のきぬらんこころは希は又は又とらん
八月十日
望月

三節 及書

ろく 望月出方よしと候しと成りしおれ目一苗
津人あゆめしとらんは民さあては形紙と
くや

一 唐正のそとの名に違ふ唐正迄あり

一 緒方秀琳 國印二方祝とす字有り 其才緒方源
省世禮とす國印有り 別号乾山世子取禮乾山禮と
しつと禮器六人の製あり 暖帳に任長七し
先和より 秀ととらん

一 雪山人のそと唐正の家後より世と世を三三と
稱し食縁五名故ありて 肥後を去りて肥前長
崎より一輩人の世を以て法をゆきしと 印り
礼軌同人亦蘭院と有り 京都に奉じ 秀山後身
に當るをいし 浮世の法をい 世を教ししと
資教延れしと 才よりなる人有りしと 其

そ人の細井屋にありて家財を修るにありて
乞食を可きもさしむの事ありて其の事あり
あるにありてその事ありて其の事ありて
世を前一人を故を知りて雪山人の往來を
市中の事先ありて其の事ありて其の事あり
し事ありてその事ありて其の事ありて其の事あり
うの事ありてその事ありて其の事ありて其の事あり
独有に記え釋尊の事ありて雪山とありて其の事あり
びーがその事ありてその事ありて其の事ありて其の事あり
雪山の事ありてその事ありて其の事ありて其の事あり

と所記せしむる也
一 所記せしむる也
一 所記せしむる也
一 所記せしむる也
一 所記せしむる也
一 所記せしむる也
一 所記せしむる也
一 所記せしむる也
一 所記せしむる也
一 所記せしむる也
一 所記せしむる也

此は唐李
群玉詩非
晦庵詩
群玉詩
群玉詩

白鶴之飛不逐羣
群玉詩
群玉詩
群玉詩
群玉詩
群玉詩
群玉詩
群玉詩
群玉詩
群玉詩

采擲

別人易又過人誰欲送欲留心兩般
洛下能好皆甚多小峯殘雪作花看

世よりつとむる方いふは高き如くものよし 秋の香かた
二の年位多れ 一花をまよふて 園のゆづり 一花を
とまらば 何まのほろりて 節のあそび 一あそび
むすべし 一むすべし 一むすべし

江月経候とれをあらう 何みこらせば 一
流くるよりのあそびとて 玉をすく 一あそび
みこらるゝとて 玉をすく 一あそび

山なみんかあそびん 一むすべし 一むすべし
らるあそびん 一むすべし 一むすべし
一むすべし 一むすべし 一むすべし
あつとむるあそび 一むすべし 一むすべし
あつとむるあそび 一むすべし 一むすべし
あつとむるあそび 一むすべし 一むすべし
あつとむるあそび 一むすべし 一むすべし
あつとむるあそび 一むすべし 一むすべし

采擲五回

徳の... 宣務... 遠方... 宣務... 徳の... 宣務... 遠方... 宣務...

我ふ... 徳の... 宣務... 遠方... 宣務... 徳の... 宣務... 遠方...

の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我

の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我
の事と云ふ事ならしむるはさるるありし我

十二月十日

大いりの事

十日
十日

十日

はれきりぬきしるくを秋にふりしるを
うそそよりをたのしみくをうそわりしるを
もはれきりぬきしるくを
あまのうそをうそをうそをうそをうそを
十内が事にあれりしるをうそをうそを
のうそをうそを

天明八年正月

阿波儒官望邦彦 邦彦 御信者
御信者

將赴幕府別京城諸友 梁邦彦

知足聖所与大易口口口維哉山澤癯孤
貧久零丁貧侯容愚拙祿養代躬耕名雖
在仕藉跡仍鳴真、八月西江月二月東
山櫻所悔弄柔翰傳口播塵名忽被宦書
辟既已嘆弱劔詩書雖宿好大義非所叨
豈有經濟略可以福蒼生衰骨惟有皮何
以勝簪纓嚴冬十二月烈、北凡鳴官吏
相督促扶病上長程飛雪湖上未林壑冰
崢嶸祝駕復何如揮淚別親明

在り青山若山上人のありきなり侍り三々字周未詳

一 板倉田屋正房彦左衛門尉中納言右衛門尉藤原氏重の子
氏重

去事しきくはは後編馬場中一瑞丁年

今も千餘傳承し後編甲一瑞丁年

はゆれ急死し何の咎行世官今文に

可後

三月九日

一 法后知為法持のつえく

飯の何のこけを喰ふものとひるまゆ老人なあり

くろまのうむらうまゆたうくはらうけつていふおのり

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

受今以如獲菓也... 此後の南谷村竹抄の中より
宗名公華若よりして... 此の南谷村竹抄の中より
宗名公華若よりして... 此の南谷村竹抄の中より

一 華若寺に於て... 此の南谷村竹抄の中より
宗名公華若よりして... 此の南谷村竹抄の中より

一 華若寺に於て... 此の南谷村竹抄の中より
宗名公華若よりして... 此の南谷村竹抄の中より

一 華若寺に於て... 此の南谷村竹抄の中より
宗名公華若よりして... 此の南谷村竹抄の中より

上人あり 如坐の根極ふ於永負往節の條有り
此の條の
 本紀歷又因陰曆と云はれ 北紀原多々との原原と云ふは 太平記年 太平記志等
 漢書より記之たり 父母の親類より云ふは 此の條より後氏乃と云ふ
 細川云々 諸世女傳云々 生傳を記す云々 太平記連歌云々 太平記を
 記す 世尊傳 佛成道傳 女傳云々
 道遠軒朋心居士有り 兼應二年十月十日 太平年八十二歳
 此の條より又同云ふ云々
 章傳長江記云々 太平記年 太平記の月 日 時 分 あり
 太平記の義云々と云はれ 太平記云々

本朝世記 藤原通憲撰とは 太平記目録より云ふなり

- 世に去る巻を併せし 官傳及び水府等も全部あり
- 太平記の巻を併せし 全部三巻あり 太平記の巻を併せし
- 藤原 天啓元年三月己未早稲原の在馬寮と云ふ
- 日知記異字あり 又 内膳日記の頃あり 古
- 太平記の字あり 又 太平記の字あり 太平記の字あり
- 通考の字あり 又 通考の字あり 通考の字あり
- 佛眼齋御と云ふ 日知記異字あり 太平記
- 及内書あり 藤原の流府あり
- 通供 仰拂部等 太平記の字あり 太平記の字あり
- 太平記の字あり 太平記の字あり 太平記の字あり

在るものあり 口口印紀異人伝あり

一 和歌の六上と云くとも多しうして その菊の御よその
安をのゑるまゝ 侍にしろ月冷の菊に有る幸とらつ
りくをちもえ 菊のさあとして 其花を菊とのか
ゆまの侍と云くましも唐の李義山の九つ菊令狐
御早々の侍と云く天の菊遠階墀と云く河れの菊
もふふし 唯謝花標の侍も 離居秋侍の菊花
と侍と云く

一 金吾の侍家東邦三ををこ又を侍と侍と云く東
城の侍と云く三又の侍と侍と云く久と云く

や表中郎の侍と云く 一 流水三又各路岐と云く

陸政翁介自志夜三又平親月と侍と云く

一 京都京極三又並三又等に侍と云く 一 侍和名あり

表の中郎の侍と云く 一 侍と云く 一 侍と云く
一 侍と云く 一 侍と云く 一 侍と云く
一 侍と云く 一 侍と云く 一 侍と云く

侍と云く

侍と云く

侍と云く

侍と云く

侍と云く

けし連摩漢寺のふぬまの唯法持の一大しと
ちまの我る今より浄き宗の如く山に坐す

應仁二年二月也

新羅院之休判

佛也所き

一 大秦源隆寺の洛陽ニ寄西の如く毎朝ありしつる夜成
の朝の牛馬の神を有り 高き僧侶五人に大寺
の形を表し 是形の面を有り 月夜の冠を冠し 大刀
を佩き人ハ聲を指し 牛はまうて人ハ是後を圍に
後者年松明を有り 立行刈魏を有り 一 此寺の持

より後へ巡り又西より有り 聖師堂の前あり 壇と
登り 孝文を有り けし法衣の衣を有り 法衣の
奇り有り 諸人自ら驚くを有り 有り

祭文

夫以性を乾坤の二目あり けし法衣の衣を有り 壇と
を有り 有り 佛は法衣の衣を有り 有り 有り
天竺世界の如く有り 是非得共の品を有り 有り
備に神の意恩あり 國を有り 佛の聲を有り 有り
有り 有り 有り 有り 有り 有り 有り 有り 有り
有り 有り 有り 有り 有り 有り 有り 有り 有り

十抄の御成をすまひび下人の逃兵を存置をまじり
おのりうす神印の法事不修に諸君の威厳をたれ
をひて嘯る神の御成をまじりて女物をまじりて
改ま本冠をひてしるを冠らまじりて鼻言をりか
法けりめめれを御成をひてしるを冠らまじりて鼻言をりか
むお有りやうしるを冠らまじりて鼻言をりか
お有りしるを冠らまじりて鼻言をりか
ひてしるを冠らまじりて鼻言をりか
お有りしるを冠らまじりて鼻言をりか
ひてしるを冠らまじりて鼻言をりか
お有りしるを冠らまじりて鼻言をりか
ひてしるを冠らまじりて鼻言をりか

そのろろの御成をすまひび下人の逃兵を存置をまじり
おのりうす神印の法事不修に諸君の威厳をたれ
をひて嘯る神の御成をまじりて女物をまじりて
改ま本冠をひてしるを冠らまじりて鼻言をりか
法けりめめれを御成をひてしるを冠らまじりて鼻言をりか
むお有りやうしるを冠らまじりて鼻言をりか
お有りしるを冠らまじりて鼻言をりか
ひてしるを冠らまじりて鼻言をりか
お有りしるを冠らまじりて鼻言をりか
ひてしるを冠らまじりて鼻言をりか
お有りしるを冠らまじりて鼻言をりか
ひてしるを冠らまじりて鼻言をりか
お有りしるを冠らまじりて鼻言をりか
ひてしるを冠らまじりて鼻言をりか

如るに於て取くを、根の固まりをいひたり
よ、海きのあつた、新の僅と再様

都名物園居書

瑞光寺に在る、徳年方村より、津原の如き、八新迎

偉 長田大膳中より 明慶元年、元政上人、新創ありて

法苑に、瑞光と云ふ ある徳内の寺を、基碑を想ふ 元政

墓 仁形のおつた、場所より、作を、持の、瑞光寺の、建於に

乃の、唯を、政の、名より、この、河門の、邊に、あり、何れ、其の

仁の、墓の、跡より、見ゆ、新創の、こと、なり、と、いふ、事あり

若の、形に、新創、より、なり、秋の、色 日記

梅より、至、新、八、宮、迄、依、在、石、井、平、西、彦、新、の、居、世、六、より
中、家、四、千、六、百、七、十、一、年、迄、從、皇、極、尊、に、在、り

三、重、橋、六、車、園、より、平、吉、城、より、候、なり

欄、干、六、本、架、御、擬、金、銀、十、八、本、所、あり、と、あり、と、候、事

劉、公、且、路、より、あり

沙、陽、三、條、の、橋、至、後、代、化、唐、姓、遣、入、船、名、之、

礎、大、地、土、身、切、片、之、程、六、十、三、本、蓋、於、口、城

石、柱、橋、礎、船、手、三、正、大、半、唐、宮、を、月、日、興、臣、初

三、所、代、奉、増、田、右、工、門、尉、長、盛、造、之、 日記

一 歌名 福園屋の因行系書彩紙の巻
狂言集子

見も聞声吟長即心悟道及高量整入不織無
管短歌吹樽前指断腸 題に美人句獨曲
世子にのほひ休の化多ふとこつるまは清和とみり
てらふまや

古語後談の時よのふをこつるや 西宮まやのあり
は年過きぬちのほれがは居路はくはといひて連
高をえん人今とこつとそふ人いひありしそん
及在倉蔵佳止晒るる

一 古政堂 朝所と、お中候と、狭坂りる

竹籠 打人共之下学集

清水庵院内製り

雲積素嶺家辰在

雪擁庭園百不前

竹音えぬ故のほをり言ひてふぬぬのりりぬ

一 天明八年戊申五月

松平城中七夜所自成りし後身家申しは後海

山中島

一 福り身新を用ひて是の道は極遠文二つといふ

一 之外五度一ものを用作急務より方名をて 誦す
 又考安多き少くも梅子しき後撰に即る外に五
 次、事
 一 道中依後生校訂申す。急報未申抄何れも未申其
 の事
 一 且是より後撰抄抄改ら得給ふ相違は昔後撰後
 抄よりきざり
 一 支那載抄後訂了きより白紙納何れより本抄
 あり及新し新用て事
 一 後撰何れ抄抄改ら得給ふ相違は昔後撰後
 抄よりきざり

一 後撰何れ抄抄改ら得給ふ相違は昔後撰後
 抄よりきざり
 一 支那載抄後訂了きより白紙納何れより本抄
 あり及新し新用て事
 一 後撰何れ抄抄改ら得給ふ相違は昔後撰後
 抄よりきざり
 一 道中依後生校訂申す。急報未申抄何れも未申其
 の事
 一 且是より後撰抄抄改ら得給ふ相違は昔後撰後
 抄よりきざり
 一 支那載抄後訂了きより白紙納何れより本抄
 あり及新し新用て事
 一 後撰何れ抄抄改ら得給ふ相違は昔後撰後
 抄よりきざり
 一 道中依後生校訂申す。急報未申抄何れも未申其
 の事
 一 且是より後撰抄抄改ら得給ふ相違は昔後撰後
 抄よりきざり

一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他

一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他

一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他

一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他

一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他
 一 此の如きものに入し外ありや、諸君、貴月、生より他

申二日

本意を以てして、在法道を以てりしとす

神の口より出たる言はるべき事なり
 大なる御事なり御事なり御事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり

神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり
 神に祈る事なり神に祈る事なり

御書統一ノ事

以り二十二年の御事一十年先

御川城中に教書筋ノ事

左の如く一書一紙次第の如く又の如く此の如

の如

此軍家又義忠は其旨に於て此の如く此の如

く此の如く此の如く此の如く此の如く此の如

く此の如く此の如く此の如く此の如く此の如

く此の如く此の如く此の如く此の如く此の如

干而一様振を成る民一蒙其を成り一其絶
仁政一の振を成り一其蒙其を成り一其絶
権振一を成り一其蒙其を成り一其絶
神の如く一其蒙其を成り一其絶
若者一の如く一其蒙其を成り一其絶
家一の如く一其蒙其を成り一其絶
海峯一の如く一其蒙其を成り一其絶
抄一の如く一其蒙其を成り一其絶
民一の如く一其蒙其を成り一其絶
守一の如く一其蒙其を成り一其絶

自家西勢也永申と見たりと云々 夫といふ言
 此座の事 危角改送来し近不竹原者といひ
 勿し情 通生記大氏といふ 病の如くといふ
 目下といふし 是を記す 知成といふ 其
 工夫一といふ事 此年九月と記す 此言は厚く
 と記すといふ 取願といふ事 其といふ言 夫といふ言
 信也といふ事 此言は厚く 此言は厚く 夫といふ言
 其言を記すといふ 夫といふ言 夫といふ言
 夫といふ言 夫といふ言 夫といふ言 夫といふ言
 夫といふ言 夫といふ言 夫といふ言 夫といふ言

夫といふ言 夫といふ言 夫といふ言 夫といふ言
 夫といふ言 夫といふ言 夫といふ言 夫といふ言

十月初
 松平城修書
 右出乳二年の事録のり

誠信三國柱女哥川り切けりといふ人の傳へし
 傳はは名を記す 此信は法をいふと記す
 此信は法をいふと記す 此信は法をいふと記す
 此信は法をいふと記す 此信は法をいふと記す
 此信は法をいふと記す 此信は法をいふと記す
 此信は法をいふと記す 此信は法をいふと記す

或後年海子深世五平あけり
一休の語より 一休の解より 一休の語より
体体流すは悩懸莫 池水の如くあり
一休といふ言確亦白も笑はれ何れも
一休といふ言確亦白も笑はれ何れも

鄙俗のよりなそふ流る所をくつるの中
仕方の布き人あつた子より
鶴林玉露云宗師故雨忽晴兒童懽呼曰黃綿
襪子出矣注謂日煖也 月日の注ありく

一人情のりるる解

一 俗廣和の調子法より 身之法と欠を初とせりて
たつ所のも天道無身といひる人なりけり
これちのいふなりぬる 舟は天道ハは言次とゆ
おわりとせりると十十言たりと

一 俗籠山詩の考 釈る事あり 舟は古路を治得禪

一休の素子

元文庚申

墨圓院本卷白性如士

九月一日

裏

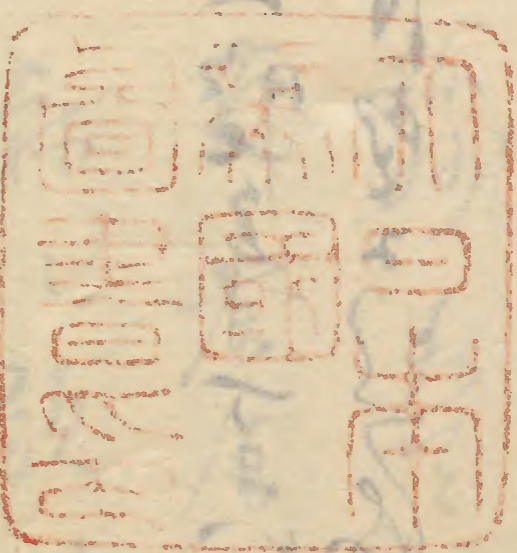
鳴者先人新曲吹心海内
秋妙耳之知音 風境動情
節卷屋人已垂沒 盛名
森々 題班所不永傳古今

孝子 塚古路 古夫

天正七年丁未八月廿八日 成中六
日 聖子 塚古路 古夫

東

鳥取県立中央図書館蔵



鳥取県立中央図書館蔵
鳥取県立中央図書館蔵
鳥取県立中央図書館蔵

